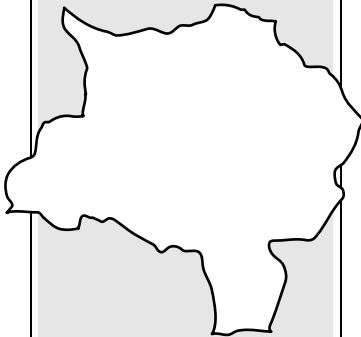


中島村



中島村長
加藤 幸一



面積 18.91km²
人口 4,997人
(H26・9・1 現在)



▲河川清掃

●中島村と阿武隈川

「母なる恵みの川」として阿武隈川は、いにしえより中島村やその流域の人々の生活や地域社会に、多大な影響と利益をもたらして来た。

川を境界として白河東（旧東村）、石川町、矢吹町と接しており、延長約9.5kmの豊かな流れを形成しています。また、下流域約2.5km手前には、白河市北側を起点として、本村に至る泉川が阿武隈川と合流しています。

本村はこの阿武隈川に添う様に田園地帯が広がり、古くから米どころとして名をはせています。今でも農業用水として取水利用され、地域の人々との共存共栄が図られております。

今は社会形態の変化や、東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響を受け、子供たちが以前の様に川で遊ぶ姿等は見受けられなくなり、寂しさを感じています。

1997年に改正された「河川法」では国の河川行政の目的が、治水と利水を中心とするものからさらに、環境の保全、整備を図ることを加えるとともに河川整備のあり方について流域の自治体や住民が責任を持って参画することの必要性が加えられました。

住民により毎年実施されている河川敷の清掃活動や、サイクリングロード整備・桜並木構想なども出されており、これからも地域一体となり阿武隈川との関わり方を考えていきたいと思っております。

●取り組みの現状

治水事業は活力ある地域社会と安全で快適な生活を実現するための、最も優先すべき根幹的事業であります。

本村でも豪雨などにより古くから幾度となく大きな水害に見舞われてきたことを受け、昭和45年から県により河川改修事業が開始され、現在80%程度の改修率となっています。下流部に両岸部の急傾斜により川幅が狭く上戸のような場所があり、洪水被害誘発要因となっており、現在もこの箇所の改修要望を継続して行っているところです。下流側市町村部の整備が未整備のため、改修が進まず大変苦慮しているところでありまして、洪水被害発生の際に住民より早期の河川

改修実施要望が出されています。

本村では、農業生産性向上を図るためいち早く圃場整備事業に着手し（昭和39年県営圃場整備事業）、全国で最初に完成をみており、この南東に広がる水田地帯は村内耕地面積の7割をしめ、河川水を灌漑用水として取水利用しています。今後将来にわたり健全な河川水の利用が維持されるよう、河川管理者、関係機関及び地域住民が協同し適正な水管理に努めていかなければならないと考えます。



▲航空写真

水質対策に対する取り組みについては、昭和60年度より農業集落排水事業に着手し平成14年度に全村整備が終了し、還元水の大幅な水質改善が図られ環境改善の一助となっています。

●今後の課題

本村は緑化木の村と呼ばれるほど、庭木等の生産が盛んで自然景観、農村景観を活かした住民総参加型の村づくりを進めております。平成9年には農業用ため池を活用し、水辺空間を中心とした公園を整備し、今も多くの村民及び村外来園者の憩いの場として好評を博しています。

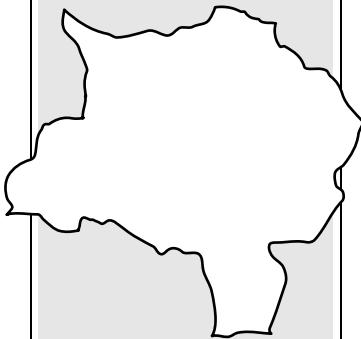
将来に向け阿武隈川についても、地域の環境財産として住民に親しまれる利用の方法を検討していく必要があります。未改修部の早期改修を実現し、子供から大人まで川と親しめる親水施設の整備、サイクリングロードなども検討して行きたく考えます。

未来の子供たちに我々が残すもの。それは安全な河川環境、安定した利水環境、楽しめる親水環境、そしていにしえより受け継いできた「阿武隈川とともに共存していく心」であると思っています。

石川町



石川町長
加納 武夫



面積 115.71km²
人口 16,809人
(H26・9・1 現在)



▲阿武隈川の白鳥

●石川町と阿武隈川

阿武隈川は石川町の北西に位置し、延長9kmにわたり西白河郡中島村及び矢吹町との境界を流れています。

阿武隈川沿いには、「鷹ノ巣」と呼ばれる景勝地（中島村では鷹ノ図と呼ばれる）があります。阿武隈山地から派生した花崗片麻岩台地が、この地の西北方で阿武隈沖積平野に強くせり出したため、その接触点を流れる阿武隈川の浸食作用を受け、数丈の断崖と丈余の深淵とに削り取られてできたものと考えられています。

今なお千古の老松が岩盤を割って自生し、断崖上に整備された鷹ノ巣公園には春は桜、秋はもみじと四季それぞれ趣のある景観を呈する憩いの場となっています。また、冬には白鳥が飛来し訪れる人々を楽しませてくれます。

さらに、阿武隈川沿いには、はるか弥生時代中期前葉の姿を示す東北地方最大の鳥内遺跡、前方後円墳三基と円墳六基からなる大壇古墳群、円墳九基からなり横穴式石室をもつ悪戸古墳群等があり、河川沿いに暮らした古代人の思いを伝えていきます。

利水事業としては、土地改良区が農業用水として灌漑面積約148haに用水取水し、町有数の稲作地帯の一つが形成されています。

時には河川の氾濫により、農地等に大きな被害をもたらしますが、阿武隈川の豊かな自然景観と広大な農地を潤す農業用水として、私たちに多くの恵みを与えてくれます。

●取り組みの現状

阿武隈川流域は過去に幾多の水害に見舞われ、最近においても農地や家屋の浸水被害が発生するなど、河川改修の緊急性、重要性は一層高まっています。

石川町内を流れる阿武隈川支川に飛鳥川・今出川・北須川・社川がありますが、近年、ゲリラ豪雨と呼ばれる集中豪雨により記録的な雨量が観測されるなど、河川管理にはこれまで以上に細心の注意と万全の防災体制が求められています。

また、良好な河川環境の確保に向け、石川町では合併処理浄化槽の設置を重点的に取り組んできました。この間、合併浄化槽に対する住民の理解も広まり、補助制度等の継続等により設置数も伸びているところです。

土地改良区では、河川水門等の適正な管理を行うとともに、春先には地元住民を含め阿武隈川の堤防の野焼き作業を行って頂いております。町においては、7月に県下一斉に行われる河川クリーンアップ作戦において、町民による河川沿いの

草刈りや清掃作業を行ない、ふるさとの美しい河川の維持と愛護思想の普及に努めています。

近年、いくつかのボランティア団体が年間を通し河川やダム周辺のゴミ拾いを実施するなど河川を守る取り組みが行政ばかりでなく一般の住民も交えた活動に広まってきています。

水質保全対策として、河川の水質を把握するため、昭和58年度から今出川と北須川を2ヵ月に1回、平成17年度からは阿武隈川の水質調査を年1回実施し汚濁状況の確認をしています。



▲鷹ノ巣と阿武隈川

さらには、震災後は実施できませんでしたが、小学生による「せせらぎスクール」を開催し、環境教育を通じて子供たちに水質保全等に対する意識高揚を図ってきました。

●今後の課題

阿武隈川の支川、北須川上流に築造された農業用ダムの千五沢ダムは、上流域での合併浄化槽設置が進んでいないものの、生活系や畜産系の汚染水の流入がみられ、また、ダムの閉鎖性により湖水の富栄養化により水質改善が進んでいない状況にあり、引き続き、上流域の関係町村と連携し水質浄化対策を強化していく必要があります。

また、石川町生活排水処理基本計画において、合併処理浄化槽については目標年次の平成32年までに生活排水処理率を70%に定めており、補助制度の継続により目標達成に向けた取り組みを進め、上流域自治体としての責任を果たすため努力してまいります。

更に、東日本大震災を教訓とし、河川をはじめ様々な災害に対応できるよう万全の態勢を整えるとともに、良好な河川環境を保つため、関係機関と連携し計画的な整備や改修等を図っていきたくと考えています。

●子供たちが裸足で遊べる川づくりを目指して

石川町は、阿武隈川の支川である北須川、今出川が町の中央部を流れ、河川沿いには桜並木や川のせせらぎが町民に安らぎと潤いを与えており、川と人との共生を後世に残していくことは私たちの責務と考えています。

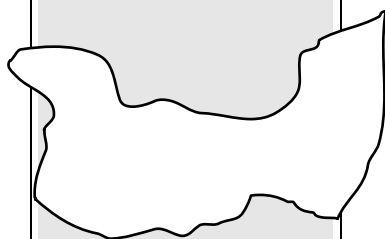
そのためには、住民との協働のまちづくりを実現し、美しい河川景観、良好な河川環境を守るため様々な活動を展開していく必要があります。河川沿い遊歩道の管理や除草、家庭で取り組む排水対策の徹底、子どもに対する環境教育の充実など、河川を守るため町民一人一人の意識を高めていきたいと思えます。

私たちの生活を支える川、豊かな川の流れがもたらす幸せを感じながら、子ども達が裸足で遊べる川づくりを目指していきます。

玉川村



玉川村長
石森 春男



面積 46.56km²
人口 6,919人
(H26・9・1 現在)



▲芭蕉の句碑

●玉川村と阿武隈川

矢吹町や鏡石町にほぼ境を接する玉川村最西端を北上している阿武隈川は、住民生活に密着した母なる川です。当村の村名となっている旧玉川（現泉郷川）も阿武隈川の支流となっています。

長さにおいて、全国第6位の阿武隈川は、福島県が全国に誇れる川であり、また、その川が当村を流れていることは、村民の誇りであるとともに親しみを感じない訳がありません。この川と流域に住む人々にとっては、幾多の歴史の繰り返しがありました。

江戸時代には、船を利用した水運として阿武隈川は貴重な役割を担っていました。通船のため難所であった乙字ヶ滝に掘削工事を行っており、現在もその跡を見ることができます。また、漁場としても、乙字ヶ滝は白河藩主への献上魚のやな場として、春彼岸から4月23日までの1カ月間にとれた鮭・鱒・鮎を献上していました。大正年代までは、阿武隈川をさかのぼって乙字ヶ滝にも姿を見せていた鮭や鱒も下流部にダムが出来てからは、その姿をみることができなくなりました。昭和40年代初頭まで夏には子供たちにとっての絶好の水遊びの場でもあり、母なる川と親しんだ少年時代が遠い記憶として残っている人も多いと思われます。

また、古代より水のあるところに人々の生活が営まれていたわけで、阿武隈河畔には、遺跡や伝説などが残されています。河畔の竜崎地区には「百八横穴古墳群」と称する、断崖に百数十基の横穴古墳が現存しています。また、古墳群より数百メートル下流には、日本の滝百選に選出されている「乙字ヶ滝」があり、春は桜、夏は新緑、秋は紅葉、冬は雪景色と四季を通じて風光明媚な名勝地として県内外から観光客が訪れています。河畔には、弘法大師の作と言われている不動明王像を安置した「滝見不動尊」が建立されており地域の人々の信仰を集めています。また、この地には江戸時代の俳聖松尾芭蕉が訪れており、「五月雨の 滝降りうつむ 水かさ哉」との句を詠んでおり、現在滝見不動尊の傍らに句碑が建っています。

●取り組みの現状

治水関連 本村域内を流れる阿武隈川は、南北10kmに亘って蛇行しているため、昭和61年の台風10号による豪雨出水や平成23年の台風15号による堤防決壊により家屋や農作物に甚大な被害をもたらしました。これらを契機に要望陳情により工事が進められていますが、近年の林地開発や集中豪雨などに伴う急激な河川水位の上昇への対応が阿武隈川及び同水系河川の治水対策の重要な課題となっています。

利水関連 石川町と当村では千五沢ダムから取水していますが、石川町にある浄水場を更新しながら引き続き利水していきます。

環境保全 毎年春先には、川堤の下草焼きや、7月第1日曜日県下一斉に実施されている「河川愛護デー」



▲乙字ヶ滝

には、河川クリーンアップ作戦として阿武隈川堤防の雑草の除草作業を実施しています。

平成11年に、公園整備事業により乙字ヶ滝公園内の公衆トイレの水洗化がなされ、平成18年に農村総合整備事業により公園整備を行いました。また国の事業「水辺の小楽校」により水辺に降りる階段等を整備し、親水できる環境を創出しました。現在も、シルバー人材センターに清掃を依頼し公園の美化に努めています。

水質保全 阿武隈川の水質保全については、生活雑排水の浄化が重要な課題です。農業集落排水事業として、平成6年7月に川辺地区が当村における阿武隈川最上流域で共用開始されました。平成11年度からは、当村における阿武隈川最下流域の竜崎地区において、更に平成19年に須釜地区と順次、流域及び支流の集落に導入されました。その他の地区についても浄化槽の導入により、河川に直接流出される生活雑排水は減少傾向にあります。

●今後の課題

取組状況でも紹介したとおり、平成23年の台風15号により堤防が決壊し、家屋や農地に甚大な被害をこうむったため、大改修により堤防が整理されましたが、高さが暫定となっているため、地域住民からは早急に完成形の堤防にするよう要望が出されています。

更に、きれいな川「阿武隈川」を創生していくためには、生活雑排水を直接川に流すことをせず、下水処理施設の整備を進めていくことが大切です

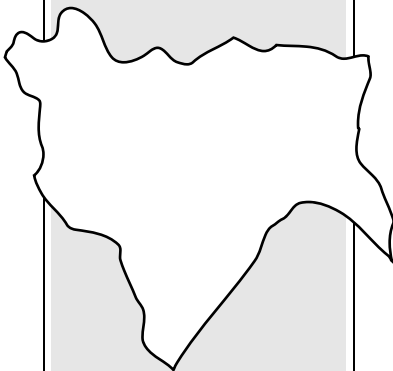
●未来へのメッセージ

治水及び水質の改善を図ることにより、母なる川「阿武隈川」とともに共存できる環境をつくり、次の世代に伝えていくことが、我々の努めであると考えています。

矢吹町



矢吹町長
野崎 吉郎



面積 60.37km²
人口 17,924人
(H26・9・1 現在)

●矢吹町と阿武隈川

阿武隈川は、矢吹町の東部を石川町、玉川村との境に接し蛇行しながら北流しています。泉川は南部の平坦地を南北に貫流し中島村で阿武隈川に流入しています。西部には天栄村権太倉山に源を発する隈戸川が北流し、釈迦堂川となり須賀川市で阿武隈川と合流します。町の中心部の矢吹ヶ原は、台地状を呈し、点在している大小の池沼並びに羽鳥ダムからの農業用水により、豊かな水田地帯が広がっています。

阿武隈川沿には、沖積世に入ってから形成された低位の段丘や氾濫原の発達もみられ、畑や水田として利用されてきました。この地域には、三城目、中野目など地名が残っており、条里制の遺構と考えられています。谷中・鬼穴古墳群は、埴輪の存在と巨大な石室から阿武隈川沿岸を支配する権力者の姿を推測され、数多くの中世の館跡とともに実在し、「貝が淵井」や「鶴舞田」などは阿武隈川にまつわる伝説を今に伝えています。また、幕末には阿武隈川通船が明岡河岸から郡山三春までの便が明治初期まで栄えました。

阿武隈川支流の隈戸川には、河川に面し約10mの断崖に、37体の仏像（尊像は薬師如来1体、阿弥陀如来1体、地藏菩薩1体、観音菩薩（各種）32体、尊名不詳2体の合計37体）が彫刻されほぼ一列に並んでいます。（昭和56年に町指定文化財になっている。）磨崖仏の大きさ、作風から同時期に製作されたものと思われるが、造立年代は『白河風土記』（文化2年（1805）刊）に記載があることから、それ以前であることは確かである。

像容などから江戸時代中期以後（1750～1800）と考えられています。崖上には、前九年の役に八幡太郎義家が奥州征夷のおり、矢柄で屋根を葺き建立したと伝えられている「八幡神社」の小祠があり、これが矢葺（矢吹）の地名のゆかりとなっています。

●取り組みの現状

治水事業は江戸時代から土手の築造等が行われてきましたが、その後も河川改修、築堤工事等が続けられています。過去については、昭和61年8月の台風10号、平成10年8月末の集中豪雨の際には大きな被害を及ぼしています。最近では、平成23年9月21日の台風15号による豪雨災害において、阿武隈川の支流にある阿由里川が内水被害により住宅等20棟が床上浸水し、これらに対応すべく阿由里川の堤体嵩上工事が行われ、平成25年度に完成いたしました。今後とも関係機関との連携を図り、阿武隈川を始めとした支流との自然環境との共生がで

きる施設整備を図ると共に、河川沿線地区住民による河川愛護活動をさらに推進するなど河川との共生を目指し活動を行って参ります。

また、町民の生命・財産を守るため、平成21年度に洪水避難地図を作成（危険箇所、避難施設情報、普段からの洪水に対しての避難勧告等が発令された際の行動、緊急連絡先避難等について掲載）、また、住民自らが避難行動を行うことができるように、避難所標識を幼稚園・小学校・公民館に設置するなど防災施設の整備を進めています。



▲阿由里川（阿武隈川合流付近）



▲阿武隈川（中沖地内）

当町は飲料水を隈川の水を取水することはなく、西郷村にある堀川ダムを水源とした白河地方水道用水供給事業団から受水、農業用水は三城目、神田、明新等の一部の地区においては、阿武隈川から受水しているものの、昭和30年に完成した羽鳥ダムからの羽鳥用水により新田約800haの荒地が美田として生まれ変わり、現在の矢吹町を形づくっています。

●今後の課題

当町では、阿武隈川とその支流の隈戸川・泉川等の水質保全や、生活環境向上を図るため公共下水道事業、農業集落排水事業、合併浄化槽設置事業の三事業を進めており、年々、河川の水質環境も向上しております。また、釈迦堂川流域生活排水対策重点地域に指定され、生活排水対策推進にあたっておりますが、今後、なお一層の自然にやさしい河川環境づくりの啓発、施設整備に努めていくと共に、広域的な取組みの必要性と重要性を感じているところです。

●未来へのメッセージ

阿武隈川や支流の隈戸川、泉川には発達した河岸段丘と、氾濫原は古くから畑あるいは水田を潤す恵みの水や飲料水として利用され、恩恵を受けてきましたが、時には大型台風、集中豪雨や未曾有の大地震により河川が氾濫し、田畑や家屋等に甚大な被害を及ぼすこともありました。

近年は、上水道や護岸の整備が進み、幕末から明治初期まで栄えた阿武隈川通船などの文化は廃退し、生活スタイルも大きく様変わりしてきました。また、記憶に新しい3.11東日本大震災時に発生した福島第1原子力発電所の事故の影響により、川で釣りをする人や川で遊ぶ子供たちを見かけることがほとんど無くなりました。

このような状況から1日も早く、放射線に対する住民の不安や健康被害の防止を図り、事故以前同様に河川で遊ぶ子供や散歩する住民がもどるように努め、さらなる水質の改善を図り、近い将来「在来魚がたくさん泳ぎ、蜚が飛び交う澄んだきれいな川の復活」を目指し、積極的に取り組んでいかなければならないと考えています。